
とある海賊

やん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある海賊

【Nコード】
N8959Z

【作者名】
やん

【あらすじ】
一方通行が目覚めた場所は何とワンピースの世界！！アクセラさんは海賊だらけの世界で一体何をするのか！？

プロローグ

「……………一体ここはどこだア？」

今まで気を失っていた一方通行がそう呟きながら起きる

「チツ……………こんなところで寝てた記憶はねーぞ？どうなってやがんだ？」

そう悪態を吐きながらあたりを見渡すと自分と同じように気を失って倒れている男を見つけた。

倒れている男がよく知る男だと気付くと突然男に蹴りを入れた

「とっと起きやがれクソメルヘンが！！」

「ぐあ！！」

蹴られたクソメルヘンは30mは離れているであろう木にぶつかり止まった。普通の人間ではありえない脚力である。

少しの間、痛みで悶絶していたクソメルヘンだがすっと立ち上がりゆっくりと一方通行に近づいてくる。

「何処のどいつか知らねーが、この学園都市第2位の垣根 帝督様にケンカを売ったんだ。覚悟は出来てんだろうなカスがあ！！！」

怒声とともに森が揺れるのが分かる。常人ならば間違いなく逃げ出すような威圧感を出しながら垣根が迫ってくる。

しかし一方通行は常人ではなく逃げ出すようなことはしない。それどころか恐怖の顔色すら見せず寧ろ楽しんでいるように見える。

と、その時一方通行に向かって何かが飛んでくるのが見えた。

「そいつはただの石じゃねえ。俺の能力で炎を纏わせた。焼け死にな」

垣根が言った通り炎を纏った石が一方通行に迫る、が、一方通行は避けようとしなない。もう石は目の前に来ていた。

垣根は直撃だと確信した。

その瞬間顔の横に弾丸を超えたスピードで何かが横ぎった。

「っ！？」

垣根は驚いていた。学園都市第二位の自分の攻撃を喰らって立って居られる人物などそうはいない。

垣根はいつでも攻撃ができるようにし、相手が出てくるのを待った。

「オイオイオイ、クソメルヘンくんよオ。いきなり攻撃してくるなんてどオいうことだア？愉快なオブジェにでもされたいンですかア？」

挑発的なその声を聞いた瞬間垣根は誰を相手にしているか悟った。

「なんだ、てめえだったのかよモヤシくん、細すぎて見えなかったぜ」

にんまりとした笑顔で垣根が笑う。

「イイ度胸じゃねエか垣根くん、ホントに死にたいらしいな？」

「ウソウソごめんってww」

一方通行を怒らせても何の得にもならないと気付いた垣根は素早く怒りの消火活動を行う。

「まアいい、それよりここが何処だかわかるか？」

怒りを収めた一方通行が垣根に問う。

「ん？何処って、学園都市じゃ……て、ここ何処だ！？」

どうやら聞くだけ無駄だったようである。

「お前今まで気付かなかったのかア？バカにも程があンだろ」

「いや、仕方ねえだろ！？いきなりたたき起こされたんだぜ！？」

「叩いてない、蹴った」

「どうでもいいわそんな事！！」

今度は垣根がヒートアップしてきた。

「ンなことはどうでもいい、お前、ここに来る見覚えは？」
心底どうでもいい感じで垣根をスルーした一方通行は垣根に質問した。

「俺にとってはどうでもよくないんだが……いや、そんなの全然ねえし、ここがどこかも分からねえ」

少し不満そうな垣根だが話が進まないため黙っておく。

「そオカ、俺もそんな感じた。またアレイスターか何かの仕業だろ。」

「アレイスターとは学園理事長で一番偉い人である。」

「多分な、こんなことできるのはアイツぐらいだろ」

垣根も一方通行の考えに同意する。

「ここにいるも何にもわかんねえ、とりあえず情報収集しに行くか」
垣根が提案する。

「ダリイがそれが得策だな」

一方通行も賛成し、二人は歩きまわることにした。

第1話（前書き）

意外と書くの疲れますね。けどいい感じに達成感が。まあとりあえず見てくださいww

第1話

「おい、町があんぞ」

垣根が発見し、一方通行に知らせる。

「あそこで話でも聞かか」

そっぴい町に入る二人

「おや、アナタ達も海賊ですか？ようこそいらっしやいました！ここはもてなしの町ウイスキーピークです！」

町の一人が二人を見つかけ話しかけてくる。

「あア？海賊？」

妙な単語が気になり一方通行は聞き直す。

「あれ？違いました？じゃあ商人の方ですね！大丈夫！どんなかたでもおもてなしますよ！」

町人は職業を勘違いしたと思ったらしく、今度は二人を商人だと言いつ出した。

「何言っつてんだ？俺ら学園都市の……あアもういいやめんどくせ」
誤解を解こうとしたがめんどくさくなつたのか話を切り上げる一方通行

「では宿にご案内いたします。こちらにどうぞ」

何だかめんどくなつた二人は、黙って町人について行つた。

……

「着きました。ここが宿です。先に海賊の方がいらっしやいますがごゆっくりどうぞ」

そっぴい町人は去つて行つた。

中に入るとさつき町人が言つてたであろう海賊らしき連中が騒いでいた。

「うらあー！もっと肉持つてこーい！」

「酒追加だ」

「そこで俺は言ってやったのさ、俺の仲間に出すなってね」

「君凄く可愛いね！ここは天国だああ！！」

あるものは肉を食い続け、あるものは酒飲みの勝負をし、あるものは女性を口説いてる。見るからに愉快そうな連中だった。

「……なんだこのバカっぽい連中は？」

垣根があきれた風に言う。

「海賊って言うてたな。この時代にんな奴らいるわけねエ、つまりだ」

一方通行が推測を伝える

「ここは俺たちのいた時代じゃないってことか」

垣根も答えにたどり着く

「そオいうこった。まアアイツならこんぐれーできそうだがな」

一方通行は自分自身で納得する。

「何でこんなことしたかって言われると興味があつたぐらいしか理由うかばねーがな」

垣根が言う。そう、アレイスターとはたかが興味本位でこんなことができる権力者なのだ。

「あなたがた新しく来られた商人のかたですね？ようこそいらじゃ・・・ゴホン、マ〜〜マ〜〜マー いらっしやいました。私はイガラッポイと申します。どうぞおくつろぎください」

突然変な髪型をした男が話しかけてきた。

「いや、別に俺たちは商売人じゃない。気付いたらここに居たんだ」垣根が頭を見ながら誤解を解く

「なんと！？旅の途中で記憶を亡くされたのですね？なんという不幸だ……せめてこの町で最高の思い出を作ってください！」

誤解は全く解けはせず、イガラッポイは二人を記憶喪失だと思ったらしい

「いや、記憶喪失でもない……ってもういいや、疲れた」

何とか誤解を解こうとしたがまたもやどうでもよくなり記憶喪失に

しておいた。

「んなことより今は何時代なんだア？」

一方通行は疑問をぶつけた

「今は海賊王ゴールド・ロジャーが死にロジャーの宝を巡り、様々な海賊が居る、大海賊時代です」

イガラツポイの答えに二人は顔を合わせた。

「ロジャーなんて海賊聞いたことねえぞ？」

「もしかしたらここは俗に言うパレルワールドって奴かもしんねーなア」

二人が考えているとイガラツポイが話しかけてきた。

「お二人は記憶を無くされたのでしょうか？仕方ないことです。さあ、辛気くさい顔しても何も変わりませんよ！？今は宴を楽しみましょうー！」

そついいイガラツポイは去っていった。

「考えても今は埒が明かねェんだ、取り敢えずメシ食つかア」

一方通行はそう言いコーヒーを探しに行った。垣根も

「まあ、腹減ったし考えんのは後にするか」

こうして二人は飯を食べ、床についたのである。

.....

「海賊四名に記憶喪失の一般人二名、今回は楽な仕事ね」

巨体の女がそう言う

「油断するなミス・マンデー、あの海賊船長は三千万ベリーなんだぞ？」

イガラツポイが鎮める

「さ、三千万ベリー！？」

小柄の女と金属バットを持った男が声を揃えて驚く

「そつだ、だから気を引き締めていけ、船長以外はカスだ、特にあ

の二人は何時でも殺れる」

「「「おおつ！」「」」

イガラッポイが激を飛ばした。今まさに狩りが始まるうとしている。

第2話（前書き）

バイトのせいでなかなか話を書けないんですね。それにそろそろ身体も動かしておかないと部活もあるし… まあ取り敢えず第三話見ちやってくださいww

第2話

ドオオオン！！パンパン！！ウオオオオ！！

騒がしい声が夜中に響く

「うつせーな、何してんだ一体？」

騒音のせいで起きてしまった垣根が文句を言う

「大方さっきの海賊を狩ってんだろよオ、海賊に親切にする町なんて怪しすぎだろ？海賊狩って賞金首や荷物とかで生活費稼いでんじエネーか？」

横になりながら一方通行が言う

「なるほど……って分かってたんなら何で言わなかったんだよ！？俺たち襲われたらどうすんだ！？」

垣根が慌てて一方通行に抗議する

「俺たちには賞金も荷物もねエから襲われる理由がねエ、口封じで襲われても負けねエしな」

落ち着いた様子で一方通行が言う

「まあ、それはそうだけどよ、教えてほしかったぜ」

すこし落ち込んだ風の垣根が愚痴を零した

と、その時、ドッカーン！！

大きな音を立てて男が壁を突き破ってきた。

「くそっ！！化け物かアイツは！？」

恐らく吹き飛ばされてきたであろう男は二人を見つけ

「ガキども起きてたのか？あんな化け物相手できねえ、先にお前ら二人を消してやるぜ！！」

男は二人に突っ込んでいった……

.....
.....
.....

「その話乗った」

オレンジの髪の女が嬉しそうに言う。

「ほ、本当ですか!？」

イガラツポイが倒れながら顔を綻ばす。

「オイ、ナミてめえ何勝手に決めてやがる」

緑の剣士がオレンジの女に言う。

「あら、この間10万貸したでしょ?その利子よ。それとも何?ア
ンタ口だけの男だったの?」

ナミは剣士に挑発的に言った。

「くっ…てめえろくな死に方しねえぞ!？」

そっくり剣士は走って行った。

「あのう、大丈夫なんですか?」

イガラツポイが尋ねる。

「大丈夫よ、ゾロは強いから」

ナミはそう言いまた笑った。

.....

「なんですか?何なんですか?ケンカ売ってきたのにこの程度と
か拍子抜けすぎるんですけどオ!？」

一方通行が言う、傍にはボロボロになった男が倒れていた。

「チッ!弱エなア、おい垣根、親玉潰しに行くぞ」

遊び足りない一方通行は親玉を潰すことに決めたようだ。

外に出てみると大勢の町人が倒れていた。

「どうやらあの海賊達は相当強いみたいだな。俺たちみたいに何か
能力があるのかもしれないな」

垣根が冷静に分析する。その時ドゴオオオオン!!

大きな音がした方をみるとサボテンが崩れていくのが見えた。

「どうやらあそこが戦場らしいな」

垣根がそう言い二人は歩き出した。

.....

「やめろってんだルフィ!!」

ゾロが伸びて攻撃してくる少年に怒鳴る。

「うるせえ!! お前を俺は許さねえ!!」

が、伸びる少年ルフィは攻撃をやめない。

「仲間割れとはくだらねえ、相手している暇は行くぞミス・バレン
タイン」

「ええ、Mr.5」

サングラス男と日笠女は歩き出す。

「オイオイ、こんなに居るんじゃ誰が親玉かわかんねじゃねエか」

垣根たちが現れた。

「んだあ? まだ海賊の仲間が居たのか?」

戸惑うMr.5

「アイツ誰だ?」

ゾロも誰だか分からず困惑している。

「おい一方通行、とりあえず海賊以外が敵だ。分かったな?」

垣根が一方通行に言う。

「わかってンよ、オイ!! そのサングラス! お前がここの親玉か
?」

一方通行がMr.5に聞く

「まあ、そんなとこだ、誰だか知らんが邪魔だ、消えろ」ホジホジ、

ポイ

Mr.5が鼻爆弾を投げつける。

「鼻くそだア? なめてンのかてめエ! ?」

「気を付けろ! その鼻くそは爆発するぞ!!」

ゾロが声を上げ注意をする。しかし鼻爆弾はもう目前まで迫ってい

た。

キュイイーン！！

爆発すると思った瞬間、鼻爆弾は一方通行に当たる直前で向きを変え、Mr・5に戻って行った。それも弾丸以上の速さで

「なっ！？」

どがあああああん！！

鼻爆弾はMr・5に直撃し、爆発した。

「くそっ！！どうなってやがる！？俺の爆弾が返されただ！？」

困惑するMr・5、すると頭上から声が響いた。

「任せてMr・5！私がやるわ！」

爆風で上空に上がったミス・バレンティンが垣根に狙いを付けた。

「私の能力はキロキロ実！一キロから一万キロまで体重を増やせるわ！喰らいなさい！一万？プレス！！」

すごい速さで落下してくるミス・バレンティン

「やっぱり能力者だったな。身体強化系のLEVEL3ぐらいじゃね？まあ俺がやるわ」

垣根は冷静だった。

「一万？ねえ、どうせならもつとおもくしうぜ」

途端に垣根の背中から翼が生えた

「なんだアイツ…能力者か！？」

ゾロが呟く、他の皆も驚いているようだ。

「な、何！？か、体が重い！？」

ミス・バレンティンが叫ぶ

「俺の能力でお前の体を通常の10倍の重力が掛かるようにした。しかも固定したから体重を戻しても一緒だ」

垣根は満足そうに笑い

「とつと埋まれ、三下が」

そう言いきると静かに座った。横には大きな穴ができた。

「よくもミス・バレンティンを！」

Mr・5が一方通行に鼻爆弾を大量に投げつけた。

「もオいいよお前」

気が付くと一方通行は目の前に居た。彼の右手がMr・5をとらえる。

「寝てろ」

そう言い終わった瞬間Mr・5は倒れた。

「なんだア？つまんねエ雑魚どもばっかだな」

一方通行はため息を吐き垣根の元へ向かう。

「つ、強い、あの二人が手も足も出ないなんて……」

ビビが驚き口に手をあてる。

「お前ら何者なんだ？敵か？」

いつの間にか喧嘩を終えていたゾロが一方通行に剣を向ける。

「何だア？この俺とやろうつてのかア？」

剣を向けられたのが気に触ったのか、一方通行は戦闘態勢に入る。

一発触発の状況

「何やってんのアンタ！？」

いきなり出てきたナミがゾロをしばくことで収まった。

第3話（前書き）

やつとルフィたちと行動を共にする直前まで、中々話が進まないW
Wそこ等辺は大目に見てくださいW W

第3話

「なーんだ、早く言えよ。俺はてつきりあの料理に好物がなくてあいつら斬ったんだと思ってたよ」ハッハッハ

誤解が解けたルフィが笑う。

「デメエと一緒にすんな!!」

理不尽に襲いかかられたゾロが怒りながら文句を言う。

「なんで無理なの?王国の王女なら10億ぐらい…」

むこうではナミがアラバスタの王女、ビビと話をしていた。どうやら訳ありのようだ。

「私の国は今、国を倒そうとしている革命軍が居て、その革命軍との戦いで国はボロボロの状態なの」

ビビが国に起きている状況を話し始めた。

.....

「なるほどなア、つまりそのB・Wのボスが主犯ってわけかア」
話を聞いていた一方通行が納得をする。

「ええ、そうなの、そしてそのボスの名をクロコダイル」

「クロコダイル!?それって七武海じゃない!そんなのバラしていいの!?!」

ビビのカミングアウトにナミが驚く、そして

「あ、いけない!ばらししちゃいけないんだった……」
いけなかったようだ。

鳥とラッコに見つかる 顔がバレル 逃げ場無い

「どうすんのよ!?!これで完全に逃げ場が無くなったわよ!?!」

ナミが泣きながら抗議する。

「ご、ごめんなさい!」

慌ててビビが謝る。

「なあ？一つ聞いていいか？七武海って何だ名前から察するに七人
つてのは分かるが、そんなに強いのか？」

今一つ状況が読み込めない垣根が質問する。

「七武海を知らないの！？いい？七武海は三大勢力の一つで相当強
い海賊のことよ！」

少しパニック気味のナミは答える。

「そんな事より俺はお前らの事を聞きてえ、お前らは一体何者なん
だ？悪魔の実の能力者か？」

先ほどから黙っていたゾロが質問する。

「悪魔の実？何だそりゃ？俺たちは学園都市の……って分からねー
か…まあ簡単に言えば超能力者だ」

ゾロの質問に垣根が分かりやすく答える。

「超能力？？ああ、あのメガネが使ってた奴か、でもお前らあんな
変な催眠使わなかったぞ？？」

ルフィがウソップを仲間にしたときに戦ったジャンゴの事を思い出
しながら言った。

「催眠術だア？この俺がそんなだせえもんに頼るように見えんのか
？」

一方通行はイラついたように言い返す。

「超能力にも色々あんだよ。例えば俺なんかは…「止めとけ」

垣根が自分の能力の説明をしようとしたところで一方通行が止める。
「何でだよ？」

垣根は不満そうに聞く。

「まだ仲間かもわからねエ奴に手の内見せるなんざアバカか？」
「どうやらまだルフィ達を信用してないらしい一方通行が垣根を諷
める。」

「なんだよー教えてくれたっていいじゃんかよケチー」

凄く不満そうにルフィ、それを見たナミが

「ねえ？アナタ達も一緒に行動しない？」

突如提案をした。

「なっ!？」

「勝手に決めんなナミ!!」

ルフィとゾロがそれぞれに抗議をする。

「アンタ達はだまって」

それを制するナミ

「アナタ達もクロコダイルに目を付けられたんだし、一緒に居た方が安全よ。それに記憶喪失でよく海の事知らないんでしょ? 何も知らずに海なんて命落とすわよ?」

もつともの理由を言うナミ

(こいつらがいれば少しは命の安全度があがるわ)

しかし本音自分の生命の安全の為のようだ。

「だってさ、どうするんだ一方通行? 俺はいい提案だと思うんだが」
自分の意志を述べ、一方通行に結論を促す垣根。

「俺たちなら大抵の事なら乗り切れる、だが船も何もねエンじゃ話になンねエ、ここは乗るしかねエだろ」

一方通行も賛成を示す。

(それにクロコダイルって奴にも興味があるしな、ドンだけつえエのか試してみるかア)

「好きにしる」

半ば呆れかけのゾロが言う。

「えー、俺は反対だ。そんなケチな奴乗せたくない」
ただ一人納得してないルフィが文句を言う。

「文句言わない。それに一緒に居たらまたあの超能力見られるかもしれないわよ?」

ナミがルフィをなだめる。

「まじか!?!じゃあ乗っていいぞ!」

超能力が見られると聞いてすぐさま意見を翻すルフィ

「なんか、単純な奴だな……」

その姿を見て垣根が呆れている。

「よおーし! 目指すはアラバスタ! クロコダイルだ!!」

こうして一方通行たちは、麦わら海賊団とともにアラバスタを目指
すことになった。

第4話（前書き）

視線は基本、一方通行の居る所になります。一方通行が何かしてる時に物語が進んでおり原作のように戦闘になるというパターンですね。まあこれかなどうなるか分からないけどwwま、というわけで第4話です。

第4話

「と、いう訳でこの船に乗せて貰う事になった。よろしく頼む」

ウイスキーピークを出航し、アラバスタに向かうメリー号の中で垣根が自己紹介をする。

「事情は分かった。俺はこの船のコックをやってるサンジだ。よろしく頼む」

「まあ、俺がいりゃお前らも大丈夫だ。ん？俺か？俺の名はキャプテン・ウソップだ！男の中の男だ！」

金髪のコック、サンジと鼻が高い狙撃主、ウソップも自己紹介をする。

「おい！陸地を発見したぞ！」

海を見渡していたゾロが皆に知らせる。

「ほら見る。あんな奴の言うこと聞かなくてもちゃんと島に着いたる？」

ルフィが満足気にナミに言う。

「もういいわよ分かったから」

ナミが呆れながら返す。実は出航前にクロコダイルの秘書、ミス・オールサンデーが”永久指針”を渡してきたのだ。

しかし自分の行く先を勝手に決められたくないルフィはそれを破壊、結果安全に行きたかったナミと喧嘩したのである。

「とりあえず”記録”が溜まるまではまでは動けないわ。それまであの島、”リトルガーデン”で待機ね」

ナミがため息を吐きながら言う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ここがどこがリトルなんだ？」

ウソップが大きなジャングルを見渡しながら質問する。

「知らない、大体こんな植物も見したことないわ」

ナミが困惑しながら答える。

ギアアギアアギアア！

「っ！？何！？」

突然の鳥にナミが驚く。

「大丈夫さナミさん、ただの鳥だ」

サンジが落ち着いて言う。

ドッガアアアン！！

何やら噴火のような音が響き渡る。

「危険よ危険！いい！？船から降りずじっとしてしましょ！！」

ナミがパニック気味に言う。

「サンジ、海賊弁当！」

「ああ？」

突然ルフィが声を上げた。

「何か冒険のにおいがする！サンジ弁当！」

よくわからない理由で出かけることに決めたルフィ

「ああ、わかった、ちよつと待ってる」

弁当を作りに行くサンジ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「よし！いくぞー！！」

すかつり冒険気分で出かけるルフィ、その後ろには気晴らしに出かけたというビビと、その巻沿いになったカルの姿があった。

「よし、俺も散歩に行くか」

剣を差し、出かける準備するゾロをサンジが呼び止めた。

「おいちよつと待てゾロ」

「あん？」

「そろそろ食料が尽きるから何か狩ってきてくれ」

食料調達を頼むサンジ、ゾロは少し考え

「わかった」

承諾した。

「お前じゃ到底狩れない奴を狩ってくるわ」

余計なひと言を付け加えて。

「まてコラア！！聞き捨てならねえな。どっちが大きな奴狩るか勝負じゃ！」

「上等じゃコラア！！」

こうして二人は船を飛び出していった。

残ったのはナミとウソップ、それに空を眺めている垣根と寝ている一方通行だけである。

ナミとウソップは互いに顔を合わせ

（（……………気まずい！！））

まだ馴れていない二人にたじろいでいた。

と、ここで勇気を出したナミが

「あ、あのう…私は見てないから知らないけど、アナタ達って結構強いんでしょ？」

少し遠慮気味に話しかける。

質問をされ

「強いも何も、あのサングラスたちが雑魚かつただけだ。そんなに凄くねえよ」

垣根が照れながら答える。

「でも相手は幹部でしょ？凄いわよ」

相手は七武海の幹部、その相手を雑魚と言い切る垣根にナミは驚いていた。

と、その時

メキメキ

何やら大きな物体が姿を現した。

「キヤアアアアア！！」

ナミが悲鳴を上げる。

ある本にこう書かれている。

「あの住民たちにとって…まるでこの島は”小さな庭”のようだ。
巨人島”リトルガーデン”この島をそう名付けよう」
そう……ナミ達が見た者、それは”巨人”だった。

第5話（前書き）

ちよつと席が止まらなく、苦しみながら書き上げました。中々アラバスタまで行けなくすいません。チョッパの所に行かないと行けないのでかなり先になるんじゃないかと思えます。ホントに申し訳ない。まあ、取り敢えず、第五話をどうぞ！！

第5話

「ガババババ！さあ焼けたぞ！酒の御礼だ、食べ！」

「食べたくありません」

巨人はブロギーと名乗り、圧倒的な力で恐竜を狩った後、その肉をナミ達に分け与えていた。

しかしこれから食べられると思っっているナミとウソップは食べることを頑なに拒否していた。

「なかなかうめエじゃねエか」

「ほんとだ、結構イケるなこの肉」

「何で馴染んでんだ！！」

そんなことを気にせず肉を食べる垣根達に突っ込みを入れるナミ達。

「ンなあことより、この時代に恐竜なンざア居ることが驚きだ俺は」
食べながら今食べている肉に疑問を抱く一方通行。

「偉大なる航路^{グランドライン}”では何があってもおかしくない。文明が発達している国もあればその逆、太古のままの島もある。グランドラインの気候がそれを可能にさせている。ガババババババ」

島の説明をし、大声で笑うブロギー

「あ、あのう、ブロギーさん？ここの”記録^{ログ}”はどのくらいで溜まるんですか？」

おそろおそろ聞くナミ

「一年だ。まあゆっくりしていけ、ガババババババ」

気楽に笑うブロギーの声がナミにとって死刑判決に思えた。

「い、一年！？そんなことしたらビビの国が無くなっちゃう！！」
ウソップが困った顔で文句を言う。

と、そのとき

どおおおおおん！！

中央にある山が噴火する。

「おっと、決闘の時間か、さていくか」

プロギーが噴火を確かめ、置いてあつた斧に手をかける。

「決闘？だれと？」

垣根が尋ねる。

「この島にはな、もう一人巨人が居る。俺はそいつと中央の山が噴火することに決闘をしている。かれこれ100年な」

「ひゃ、百年！？どうしてそんなに！？決闘している理由はなんなの！？」

プロギーの言葉に驚き、理由を尋ねるナミ。

「決闘し続ける理由は”誇り”喧嘩した理由などは………とうに忘れた！！」ガキーン！！

斧と剣がぶつかり合う。

「互いに故郷が恋しいなドリー！！」

プロギーがもう一人の巨人に話しかける。

「ああ、だから俺がお前を倒し俺が故郷に帰る、プロギーよ！！」
もう一人の巨人、ドリーが応える。

そこからは壮絶な戦いだった。

「ぬうあ！！」ブォォン

ドリーが激しく剣を打ち付ければ

「おりゃ！！」キーン！！

プロギー斧で受け止め

「ふうんならあばあ！！」

プロギーが叩きつければ

「あ、危ない！！」

「なんのお！！」

ドリーが兜で受け止める。

激闘の最中

「すげえ、これだ、これだよ！俺が目指しているのは！！」

ウソップが興奮して目を輝かしている。

「確かにすげえな」

垣根も同様に己の興奮を隠せない。

「わかるのか垣根!？」

「ああ、あれが戦士って奴なんだろう」

「どうやら二人は気が合うようだ。」

「下らねエ」

一方通行はそんな二人をほっとき、空を眺めている。

（誇りだア？ そんなもんが何になる？ そんなもんで強くなれんのか？
いくら大層な誇りを持ったからって、力が無けりゃ何ンもできね
エ、誇りだけじゃ誰も守れねエンだよ）

巨人たちは最後の力を振り絞っていた。もう武器は使っていない。
殴り合いである。

「うおおおお!!」

「おりゃああああ!!」

ドンッ!

お互いに決まった。

「7万3千466戦」

「7万3千466引き分け」

「カ」

ズウドオオオオン!

大きな音を立て、二人の巨人は倒れた。

「ガバババ! ドリーよ! 実はさっき人間に酒を貰った。どうだ!」
「？」

ブロギーが倒れたまま聞く。

「そりゃいい! 久しく飲んでねえ! 分けてくれゲギャギャギャ!」
ドリーも寝たまま答える。

「どうやら巨人たちの決闘は終わったようだ。」

第5話（後書き）

戦闘シーンがグダグダですいません。何分はじめてなもので、出来るだけ上達できるようにするので応援よろしくお願いします！！

第6話（前書き）

疲れながらも書き上げました。 またもや意味が分からない戦闘シーンですがどうぞ見て言ってください！

第6話

「ガババババ！そうか、向こうに居た人間はお前らの仲間か！麦わら帽子に女が居った！」

ブロギーが酒を飲みながら伝える。

「ルフィとビビだわ！」

ナミが顔を明るくさせる。

「なあブロギー！」

ウソップが話しかける。

「俺はいつか、アンタ達エルバフの戦士のように誇り高いなる！！」
そう言いながら目を輝かせる。

「ガババババ！そうか、俺たちエルバフの戦士にとって誇りを傷つけずに死ぬことは”名誉ある死”なんだ。名誉ある死は故郷エルバフで語り継がれる。俺たちにとって誇りとは宝だ！！」

「誇りは宝かあ……………」

「カッコいいなあ」

ブロギーのな話を熱心に聴くウソップと垣根どおおおおん！！

またもや山が噴火をする。

「ガババババ！さて、行くか！」

斧を手にし立ち上がるブロギー

「がんばれブロギー師匠！」

目の前にはドリーが来ていた。

そして……

「うらあああ！！」

「ふんぬうああ！！」

戦いが始まった。

しかし様子がおかしい。

「オイ、あの巨人なンかフラついてンぞ」

一方通行の言うとおりドリーはふらついていた。

「どうしたドリー！動きが鈍いぞ！？」

「……なあに、いつも通りさ」

斧を叩きつけながら聞くプロギーだがドリーは平然を装い答える。

「今のうちにルフィとかを探しに行くわよー！」

ナミがウソップを引きずる。

しかし一方通行達についてはこない。

「俺らあつちを適当に散歩してるわ」

一方通行達はがナミとは反対方向に歩きだす。

「…分かったわ、ちゃんと船に戻りなさいよ？」

ナミも納得し歩く。

巨人たちの打ち合いは続く。

と、その時ドリーが足を滑らした。

「っ！？」

「もらったあああー！！」

ザシユー！！ドオオオンー！！

肉を切る音がし、続けてドリーが倒れる。

「一世紀…永い戦いだった…！」

プロギーは泣いていた。どうやら戦いは終わったようだ。

「誰だああ！！」

島にルフィの声が響く。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、今あのルフィとか言う奴の声が聞こえなかったか？何か叫んでるみたいだったが……」

垣根が一方通行に尋ねる。

「さアな」

興味がないのか気のない返事で答える。

「何か巻き込まれんのかも知らねえ、行ってみないか？」

心配になる垣根。

「チツ、とつと行くぞ」

二人はナミの言った方へ向かう。

「……どうなつてんだこりゃ？」

垣根は思わず呟く。目の前には巨大なロウのツリーが立っており、ナミ、ビビ、ゾロの三人が突き刺さっていた。

近くにはルフィが黒のマークの上に立ってブツブツ呟き、地面にはウソップとカールがボロボロで倒れている。

よく見るとMr.5、ミス・バレンタイン、それに変な髪形の男Mr.3と少女ミス・ゴールデンウィークが笑っている。

「一方通行！？よかった！助けて！このままじゃロウにされる！」
二人を見つげ大声で叫ぶナミ。

「げ！？あん時の小僧！！何でココに！？」

二人に気付き、たじろぐMr.5

「何だガネ？ただの小僧だガネ？早く消せ」

何も知らないMr.3は呑気に命令する。

「……大体分かった、要するにこいつらを倒せばいいんだろ？」

何とくなく理解したのか一方通行は笑う。

「フン、貴様らごときクズに何ができると言うんだガネ？」

「今度は油断しねえぞ！」

「ええ、私たちの恐ろしさを分からしてあげるわ」

「……早く休憩したい」

それぞれに意気込むB・W、一人関係ないこと言っただきがしたが……

「垣根、まずはあのロウソクだ」

「おうよ」

うなずく垣根、途端に翼が生える。

「！？能力者か！？」

驚くMr・3

「ロウソクの周りの空気を燃えやすくした。ウソップ、火は任せるぜ？」

「な、何を言ってるんだガネ！？」

戸惑うMr・3

「…エルバフの誇りを傷つけたお前らを俺は絶対ゆるさねえ…！くらえ！」

ウソップが火薬玉を放つ。

「フハハハハハ！そんな小さな火種で私の”キャンドルサービス”が壊せないガネ！」

勝ち誇ったように笑うMr・3、火薬玉がロウに当たる。

ポオオオオ！！

途端に火は大きな炎になりロウを溶かしていく。

「…焼き…鬼！……斬り！！」

突如炎から飛び出したゾロがMr・5を斬る。

「燃える刀も悪くねえ、……垣根だったか？礼を言う」

ゾロは刀を仕舞いながら礼を言う。

「おのれ…！許さんぞ！！”キャンドルチャンピオン”！！」

Mr・3が全身をロウで包み、一方通行に襲い掛かる。

「おせエンだよ」

しかし、そこにもう一方通行の姿はなかった。

いつの間にか後ろに居た一方通行はその手でMr・3のロウに触れる。

たったそれだけで”キャンドルチャンピオン”は崩れ去る。

「……え？」

「寝てる」

ドサッ！

「テメエがぼざいたクズに負けるとは、テメエはクズ以下だな」

周りを見渡すとミス・バレンタインはナミやビビにやられ、ミス・ゴールデンウィークはカルーに捕まっていた。

「すごい……！あの二人ほんとに強い！」
ビビが驚く、二人が来てたった数分、その数分で戦いは幕を閉じた。

第6話（後書き）

もうすぐ今年も終わりですね。いや、ひょっとしたらこれを見てる方にはもう超したたと言う方が居るかもしれません。こんな駄文を読んでも頂き本当にありがとうございます。来年（今年？）もまたよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8959z/>

とある海賊

2011年12月31日19時49分発行